
とある一行の記録

有華島すいり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある一行の記録

【Nコード】

N2015Y

【作者名】

有華島すいり

【あらすじ】

とある少女たちの時代から約1000年前。とある旅の一行の、「その後」の旅の記録。
(Pixivにタイトル違いの同作品あり。最初の1話以外は同じ一行の別の話を載せる予定)

雨宿り

しとしとと雨が降る。

今いるこの祠の外は草原で、雨が降り出す前にはかなり先まで見えていたというのに、今ではあまりの暗さに少し先までしか見えない。祠の入り口からその草原を見て、少女はため息をついた。

布製のマントを羽織り直すと、ポニーテールに束ねた長い金の髪を翻して中へと戻る。

翡翠と同じ緑の瞳はぎりぎりまで外を見ていたけれど、最後には完全に逸らされた。

「ただいまー」

気持ち造ったと言わんばかりの短い廊下を抜け、奥の広間へと戻る。声をかければ、入口のすぐ側に置かれていたテーブルについていた青年が顔を上げた。

肩胛骨を多い隠す程度に長い宵闇色の髪が揺れ、群青の瞳がこちらを見る。

「ユース」

少女の姿を認識したらしい青年が微笑む。

口にされたのは少女の名前だ。

自分と呼ぶその声に、少女はにつこりと笑みを返した。

「ご苦勞様です。どうでした？」

「うーん。明日の朝まで雨みたい。雨の精霊様がたくさんいるみたいだから」

「そうですか。では今晚はここで明かすしかなさそうですね・・・」
「ユースと呼ばれた少女の言葉に、青年はため息をついた。」

その反応に、ユーシスは僅かに眉を寄せる。

「アスレイドはここで大丈夫なの？」

「ええ。こう見えても、そのあたりは頑丈な方なので」

にこりと笑って答えた青年を、ユーシスは「ふーん」と呟きを返し
ながらじつと見つめた。

ここは普通の場所よりも彼の『苦手とする力』が強い場所だけれど、
少しも無理をしている様子がないように見える。

彼が『苦手とするもの』に対する耐性が強いことは知っていたから、
嘘ではないのだろうと判断して、それ以上は聞かないことにした。

「ところでミルザは？ テスタもないみたいだけど・・・」

「ああ、彼らなら奥の探索に——」

アスレイドと呼ばれた青年が、そう言つて奥を示そうとしたその瞬
間。

「こんの馬鹿ミルザあああつ——」

突然祠の奥から聞こえてきた大声に、ユーシスはびくりと肩を震わ
せた。

慌ててアスレイドを見れば、彼も何が起こつたのかわからないよう
で、ぽかんと奥を見つめている。

何が起こつたと思うか。

そう尋ねようと口を開こうとしたその瞬間、再び奥から怒声が響い
てきた。

「拾い食いはすんなって、あれほど言つたばかりだろうがあああつ

！——」

「うぐぐ・・・」

共に何やら大きいうめき声まで聞こえてきたら、理解できないはず
がない。

何が起こつたのか察して、ユーシスは思い切り大きなため息をつい
た。

「何、またやったの・・・？」

「・・・らしいですね」

アスレイドも事態を察したらしく、重苦しいため息をついた。
どうやら、この旅のリーダーである青年が、その容姿からは全く想像できない悪癖を発揮して、共に奥へと進んだ少年に怒られているらしい。

「だってもつたいたないじゃないか・・・」

「あのなあ！！だからってこんな無人の祠の、何日放置してあるかわかんねえお供え物食うんじゃないし・・・！！」

「でも食べられるかもしれないし・・・」

「食べられない可能性を考えろっ！！」

2人の答えは正しかったらしく、聞こえてきた会話に揃ってため息をつく。

そう、実は、このパーティのリーダーには拾い食いをする癖があった。
た。

祠の奥でお供え物を見つけた途端、その癖が発揮されてしまった、
といったところなのだろう。

まあ、こんなことは実はいつものことだ。
いつものことなのだけれど。

「・・・あんなの見たら、きつと世界の人は幻滅するわね」
「・・・僕もまさか噂の勇者殿があんなのだとは思いませんでした」

ユーシスの呟きに、アスレイドが深いため息について同意する。

「初めてあったときはまともな人間だと思ったんですが」

「まあ、シリアスのときはかつこいいから、ミルザって」

「普段はああですけどね」

きつと世界の多くの人は知らない。

1年前、世界を救ったとされる勇者が、こんなにも貧乏性な人だな

んて。

今から数十年前、突然世界を暗黒の時代が襲った。

この世界で最も歴史の長い大国が、突然世界征服に乗り出したのだ。元々世界の中心だったこの国は瞬く間に各国を植民地としていった。信頼を集めていたはずのその国が突然そんな暴挙に出たのは、とある女のせいだった。

突然現れたその女は、その大国の王に取り入り、絶対の信頼を得、国を好きに操れる立場になっていったのだ。

実は魔族だったその女は、最終的に王を自由に操り、世界を次々と我が物にしていた。

最後には魔王とすら呼ばれていたその女を打ち倒した勇者こそ、今ユースとアスレイドの目の前で拾い食いをし、腹を壊してのたち回っている青年だと言ったら、一体どれくらいの人信じらるうか。

「はい。収まった？」

「ああ……。ありがとう、ユース」

目の前でまだ腹を抱えている青年を見て、ユースはため息をつく。額にまだ脂汗を浮かべている彼は、その琥珀色の瞳に涙を浮かべていた。

外見はいいから、それが妙に色っぽさを増しているところが憎らしい。

汗に塗れた茶色の髪が顔に張り付いて、きつと何も知らない女性が見ればときめく、のではないかと思う。

ユーシスの感性は普通の人間のそれと違うから、あくまで憶測だけだ。

「まったく！本当にいい加減にしろよな！」

「まあまあ。今に始まったことじゃないですし、町では出ないんだからいいじゃありませんか」

「よくねえよっ！！」

アスレイドが宥めようとした途端、黒髪の少年が叫んだ。

この世界では珍しい黒髪を持つ少年は、その真紅の瞳でぎろっと茶色い髪の青年を睨みつける。

「だいたいミルザ！あんた一応勇者何だろうっ！？なら勇者だっていう自覚ちゃんと持てよ！」

「自覚はあるさ……」

「嘘付けこらあっ！！」

「……いや、あるとは思うよ？一応ね」

ぼそりと呟かれた茶色の髪の青年の答えに激怒する黒髪の少年を見て、ユーシスはぼそりと呟く。

自覚があつて、だからこそ人前では拾い食いなどしない。

本当に困ったものだと思う。

「仕方ないだろう。選定を受ける前は、そうでもしないと食べていけなかったんだから」

「いや、だからってな……」

「テスト。もう諦めなよ。何言っても無駄だつて」

無駄でなければとつくに治っている。

もう3年は共に旅をしている自分が言うのだ。間違いない。

「……わかっているんだけどさ。なんて言うか、こう……」

「納得いかないのは僕も同じですが、諦めも肝心ですよ、テスト」
アスレイドにまでそう言われ、肩をぱんつと叩かれてしまつては、もう何も言えない。

納得いかないという表情を隠しもせずに、黒髪の少年——テスト

は渋々と黙り込んだ。

それを見て苦笑していたはずのアスレイドが、ふと何かを思いついたような顔でミルザと呼ばれた茶色の髪の青年を見る。

「でもそうですね。こうなったら荒治療もひとつの手かもしれない」

「へ？」

「え？」

「荒治療って？」

ぽかんと彼を見つめる男2人に代わって、ユーススが尋ねる。

その質問を待っていましたとばかりに、アスレイドはにっこりと笑った。

「次の街でひと月ほど暮らしてみるのはどうでしょう？」

即ち、自分たち以外の『人前』に長くいれば、いくらミルザだってやめざるを得ないのではないか。

そう考えた上で、アスレイドはその提案を持ち出した。

崩壊と出会いと

ただ、普通に暮らしていただけだった。

確かに子供じみた夢は持っていたけれど、それでもきつと、根本にある願いはただそれだけで。

こんな田舎じゃ、世間で流れる噂は噂に過ぎなくて、ずっと遠い世界のことだと思っていた。

だから、ああなったとき、どうしたらいいのかわからなかった。

「な・・・っ」

王都への買い出しから帰った俺の目の前にあったのは、焼け爛れた黒い土地。

故郷の村があったはずのその場所は、ぼろぼろに壊され、人間の気配なんて感じなかった。

「なんだよ・・・これ・・・？」

壊れ、焼け崩れた家屋。

真っ黒に燃やされた田畑。

2週間前にあったはずの光景は全て消え去り、面影など残っていなかった。

「・・・・・・・・っ！」

荷物を放り出して、村が見渡せる丘を駆け降りる。

慣れたはずの道を、何度も何度も転びそうになりながら、必死に走る。

村へ、家へ、友や家族のいるはずの場所へ。

けれど、目の前に広がったのは、僅かな希望すら打ち砕くような無惨な光景だった。

「――っ!？」

遠くから見て、想像した光景なんて、比べものにならなかった。言葉を、いや、呼吸すら、一瞬忘れたような気がした。

「嘘、だろ・・・？」

ようやく絞り出したのは、震えた声。

がちがちと歯がぶつかって、握り締めた拳が震えて、気がついたときには駆け出していた。

「親父・・・っ、母さん・・・っ、ジニーっ!!」

2週間前、笑顔で送り出してくれた両親と1人下の妹。

妹は、もうすぐ隣の婚約者と結婚するのだと笑っていた。

あの子の嫁入り準備の為に、俺が王都に買い出しに行った。

「ヴァルもラークも、みんなっ、返事しろよっ!!」

幼い頃から一緒に育った友人。

みんな村から出て行き始めた今も、残っていた大切な友達。彼らだって、土産話を楽しみにしていると言っていた。

「返事してくれ・・・頼むから・・・誰か・・・っ」

誰でもいいから、どうか。

誰か、誰か1人でも、できればみんな無事で、家だけが無くなったのだと信じさせてほしい。

1人でも生きていれば――。

必死に走っていたそのとき、見覚えのある服を見つけて足を止める。焼け焦げた木の陰に、もたれ掛かっている少女の姿。

後ろ姿だったけれど間違えるはずがない。

それは必死に探していた、妹の姿で。

本気で安堵して、駆け寄った。

「ジニー……………っ!!?」

ぽんつと肩に手を乗せる。

その途端、彼女の体がぐらりと傾く。

ごとりと、まるでそんな音が聞こえるようにゆっくりと倒れた彼女の、見開いた目がこちらを向いた。

その腹は、ぱっくりと割れていて。

「う、うあああああああ――っ!!!」

気がついたとき、俺は腹の底から絞り出すような叫び声を上げていた。

仇の存在を知ったのは、そのすぐ直後。

旅人から知らせを聞いて駆けつけたという、妹の婚約者からだ。

『法王』を名乗る魔族が、気まぐれに村を襲っていったと。

だから、その魔族の城に乗り込んで、復讐しようと思った。

けれど、呪文も使えない俺が、王と呼ばれる魔族に勝てるはずなかった。

だからあつさりと負けて、捕まって、気まぐれで牢屋に閉じ込められて。

もう希望なんて、光なんてないと思っていた。

けれど、あいつは、そんなときに現れたんだ。

「……え！……るよ！」

遠くから女の声が聞こえた。

その声に薄く目を開ける。

顔を上げようとすると、がちやりと鎖が鳴った。

天井から吊されたそれは、2つに分かれて俺の手を絡め取っている。食事もろくに取っていなかったから、そうやって外を見ようとするだけで精一杯だった。

「ユースス？」

「こんなところに人間がいるはずが……えっ！？」

牢の外に人影が現れる。

少し目がぼやけてしまっているけれど、たぶん3人。

うち2人は髪が長く、1人は髪が短かった。

「ほら！いるじゃない！！」

髪の長い奴のうち、1人は先ほどの女らしい。

こんな暗い場所でもわかるほどの明るい金の髪が、きらきらと揺れている。

もう片方の髪の長い、こちらは暗い色の髪らしい奴が、驚いたよう

に呟いた。

「そんな・・・どうして・・・」

「アスレイド」

どうにも男らしい長い髪の男を、短い髪の男が制した。そのまま、彼は膝をつき、こちらを覗き込んでくる。

「あ、駄目だよ！これあたしたちが触ると・・・っ！」

「わかつてる」

女の制止に頷くと、彼は改めてこちらを覗き込んできた。

「君、大丈夫か？僕らがわかるかい？」

彼が声をかけてくるが、無視する。

ここに来るのは魔族だけだ。

心配そうに見えたって、それは俺を馬鹿にするための演技に決まっていた。

だから無視する。

「君？」

それでも、彼は再び問いかけてきた。

答えるまで諦めなさそうなその様子に、仕方なく口を開く。

「・・・・・・・・何だ？あんたら」

声が掠れていたのは、きっと最後に叫んだきり出していなかったからだ。

1人でずっとここにいて、声を出す必要なんてなかったから。その声を出した瞬間、女がぱあっと顔を輝かせて笑った。

「よかった！意識あるよ！」

「ユーシス、静かに」

大きな声を出した女は、しかし彼に怒られ、慌てて口を塞ぐ。それを見届けてから、彼はもう一度こちらを見た。

琥珀色の瞳が、まっすぐにこちらを見る。

「大丈夫かい？自分のことはわかる？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「君？」

彼が心配そうにこちらに声をかける。

けれど、答える必要なんてないから、黙っていた。

「声、出せないのかな？」

「先ほど話していたじゃないですか。違うでしょう」

長い髪の2人組が、勝手にそんなことを言っている。

髪の短い奴は、静かに俺に話しかけ続けるけれど、無視した。

ずっとそんなことをしていると、ずいぶんと短期らしい長い髪の男が痺れを切らしたらしい。

俺に見せるようなわざとらしいため息をつくとき、そいつは俺を睨んだまま髪の短い男に声をかけた。

「ミルザ。答えない人間を相手にする必要はありません。早く法王を――」

「ミルザ？」

男が口にした名前に、俺は思わず顔を上げて聞き返していた。

俺の村は田舎だ。

そんな田舎にでも届いている、ある1人の男の名前があった。

世界を支配すると宣言していた帝国。

その帝国を実質支配していた『魔女』を倒したという、精霊が宿る国から現れた若い男。

確か、世界を司る精霊が選んだという、勇者。

「ミルザって、あのミルザか？あんたが？」

そう尋ねた途端、彼は一瞬驚いたように目を丸くした。

それが、すぐに悲しそうに細められる。

「・・・君のいう『あの』がどのミルザのことかはわからないけれど」

「ダークマジック！あの国の魔女を倒したのは、あんななのか！？」

誤魔化そうとする彼の言葉を遮って、尋ねた。

その途端、彼はますます悲しそうな顔をした。

「・・・ああ。そうだ」

ほんの少しだけ間が空いてから、彼が口を開く。

「僕が、ミルザ」エクリナだ」

それが、俺とあいつの出会いの瞬間だった。

「そんなときまでは、まさかミルザがこんな奴だとは思わなかったんだけどな」

「ああ、それわかる。あたしもそうだったもん」

となる町の食堂で、不意に呟く。

その言葉に返事をしたのは、あのときの長い髪の女——ユーシスだった。

視線を向ければ、彼女は楽しそうにくすぐすと笑う。

「マリエス様から選ばれた勇者が来るとか聞かされて、どんな子が、なんて思ってたんだけど」

「子……」

「あたしから見れば、人間の若者は全員『子』なんですう」

「右に同じく」

思わず呟いた言葉に、ユーシスとともに答えたのはあのときの長い髪の男——アスレイドだ。

一見するとそんなに年が離れていると思えない2人のその言葉に——瞬唖然としてしまってから、彼らの素性を思い出し、俺はため息をついた。

「まあ、あんたたちから見ればなあ。寿命だって、だいぶ違うわけだしな」

ユーシスとアスレイドは、実は人間ではない。

一見すると10代後半から20代前半の少女にしか見えないユーシスだが、実は妖精と呼ばれる種族の長だ。

妖精、と一言で言う、人間が思い浮かべるのは背中に虫のような羽の生えた小人なのだけれど、長である彼女は特別で、人のような姿を取れるのだという。

アスレイドは、俺が一度は滅ばしたいくらいに憎んだ魔族だ。

魔族が何故、勇者と呼ばれるミルザと旅をしているのか。

それは、俺の口から話してはいけないことだと思っから、話せない。俺も最初は仇と同じ種族であるこいつを嫌悪していたけれど、ミルザが仇を取ってくれた今、そんな気持ちは無くなった、と思っている。

「でもねえ。ミルザにそんな話、しない方がいいと思うよ？」

物思いに耽っていると、ふとユーシスが口を開いた。

その言葉に、俺は彼女へと視線を戻す。

「なんで？」

「だってほら。彼嫌いだから。特別扱いされるの」

「だから人里では偽名を使っているわけですからね」

アスレイドが付け足した言葉に、そういえば、と思う。

ミルザは、自分が『勇者』と呼ばれる存在だと知られることを嫌って、人里で本名を名乗ったことはなかった。

少なくとも、俺と一緒に旅をするようになってからは、一度も。

「あ、いたいた！」

聞こえてきた声に、食堂の入り口を振り替える。

見れば、扉の側に洋皮紙らしきものを握ったミルザが立っていた。

「あっ」

「よおー」

ぱつと明るい表情を浮かべたユーシスの前で、彼に向かってひらひらと手を振る。

それを見てなのかどうかはわからなかったけれど、ミルザは怒りを隠さない表情でずんずんとこちらに向かって歩いてきた。

「お帰りなさい、『リフィス』」

アスレイドがあくまでにこやかに声をかける。

普段のミルザならここで笑顔を返すのに、今日はそれはなかった。ばんっと思い切りテーブルを叩いて、俺たちを睨みつける。

「まったく！いつも僕にばかり仕事探させて、みんなも少しは手伝えよ！」

「えへへ」

「そういうのは勝手がかわりませんから」

「俺が探すと、文句言うじゃん」

「だからって・・・！」

コーシスが笑って誤魔化し、アスレイドがはつきりと拒否を口にし、俺が文句を言えば、ミルザは頭を抱えてしまった。

まあ、俺の取ってくる仕事と言えば退治屋みたいなものばかりで、文句が出たから行かなくなっただけなのだけれと、だからとはいえさすがにこんな彼の姿を見てると心苦しくなる。

普段は悪癖のせいで悩まされているとはいえ、あれさえなければミルザはお人好しの『いい奴』で、恩人だから。

そんな奴を悩ませていることは、何だか悪いことのような気がした。「うし！じゃあこの仕事は俺が行ってくる！」

席を立て、ミルザが握っていた依頼書をひょいっと抜き取る。

まさか、俺がそんなことをするとは思ってもいなかったのだろっ。抜き取った一瞬、彼は反応しなかった。

「へ？」

我に返ったミルザが慌ててこちらを見たときには、俺はもう食堂の入口に向かって走り出していた。

「早めに終わらせてくるからな！みんな、宿取って待っていてくれよ！」

「は？って、おいテストっ！！」

「行つてらっしゃーい。がんばってねえ」

ミルザの声なんて無視して食堂を飛び出す。

外に出て、初めて仕事の内容を確認して、少し後悔したけれど、気を取り直して歩き出す。
依頼書に指示された場所を探しながら町を見回して、ふと目を細めた。

ミルザと出会わなかったら、俺はあの薄暗い牢の中で一生を終えていたと思う。

あの子の自分は、故郷も家族も失って、仇も取れなくて、生きる目的を失っていたから。

でもミルザと出会って、彼に世界に連れ戻してもらって、今ここにいる。

それは、きっと幸運なことなのだろう。

帰る場所や待っている家族はもうないけれど、それでも生きていたと思うのは、彼のおかげだという気持ちはあった。

だから、自分にできることは精一杯手を貸したいと思う。

彼の旅が、何の目的もない平凡な旅だったとしても。

「とりあえず、だ」

この仕事を片付けよう。

食堂を出てくるとき、ユースとアスレイドが笑っていた気がするけれど、気のせいだということにする。

だって、ミルザに気づかれていなければいいのだから。

そう、彼に気づかれなければ。

「あいつにバレて堪るもんか」

町では人の目をいつも気にしているあいつを少し休ませてやりたかったという本音なんて、絶対に言っちゃらない。

遠い日、近い日

全部全部、決められていた。

生き方も未来も、何もかも。

それはたったひとつの偶然から始まった、運命。
たった一度の出会いから定められた、必然。

私は、最初は普通の女の子に過ぎなかった。

妖精界には何処にでもいる女の子で、特別な一族に生まれたわけでも、特別な集落の生まれでもなかった。

普通に同年代の友人たちと遊び、はしゃいで、大人に怒られて。そんな風に過ごしているだけだった。

私がまだ少女と呼ばれていた頃、世界はもっともつと若く、幼かった。

人間界は漸く人が文明を進め始めたところで、他の世界——精霊界や妖精界は、人間界ともつと近い場所にあった。

それは、その2つの世界だけではない。

もうひとつ、人間が今では知ることはもちろん信じることもほとんどない世界。

そんな世界にも、私たち妖精や精霊は自由に入りにできたのだ。

今の人間は、いつの間にか精霊が全ての世界で最も上位の種族だと信じているけれど、本当は違う。

この世界にも、いるのだ。

『神』と呼ばれる、種族が。

神界と呼ばれるそこへは、精霊界や妖精界からならば自由に出入り

することが出来た。

扉を向ければ、その前に広がるのはこの当時の人間界と変わらないように見える光景。

違うのは、そこにいる人々の背に翼が見えることだった。

翼を常に背に持っているのは、下級の神族だ。

上級になればなるほど、翼は見えなくなり、必要なときに具現化出来るのだと聞いた。

だから目の前にいるのは、下級と位置付けられる神族だ。

下級と上級の神族には寿命がある。

人間や私たちと同じように、両親から生まれ、途方もなく長い寿命を全うして、永遠の眠りにつく。

では、その上は。

その上、つまり上級の上級。

私たち妖精が、便宜上『最上級』と呼んでいる神族こそが、本物の神。

彼らには寿命がない。

世界の創世記に誕生し、以来ずっと生きている。

様々な元素を司り、全ての世界を維持していく、いわば『柱』のような存在。

それが人間界では認知すらされていない、この世界の一番上。

神界の中でも『聖域』と呼ばれる場所に住まい、そこから出ることがほとんどないと言われる存在。

そんな存在と私が出会ったのは、本当に全くの偶然。

私の生まれた集落が、たまたま精霊神——精霊の中で最も力の強い、精霊たちの長に当たる方——と結びつきが強く、よく神界に使いに出されていたから。

私がたまたまそのとき、精霊神の御用聞きをすることになったから。

そして、たまたま初めて行く場所で道に迷ってしまったから。

そんな偶然が積み重なれば、出会うはずもなかったのだ。

あの、深い海のような色を持つ、あの人に。

たまたま出会ったその森は、その人が住んでいる区域の一部だった。その偶然の出会い以降、私はたびたびその人に会いに行った。最初はその深い藍の瞳に惹かれた。

会っていくうちに、その人柄に惹かれた。

人として、強い憧れを抱くくらいに、強く。

だから周囲に怒られても神界に行くのをやめなかった。

その人は自分の住んでいる神殿への行き方を教えてくれたから、私はいつでも遊びに行けた。

そんな生活で、一度だけすごく驚いたこともあった。

普段はその人しかいないその神殿に、別の人がいたときだ。

憧れの人とは対照的な、燃えるような赤い髪。

炎を思わせる紅の瞳を持つその人は、私をじっと睨みつけていたと思う。

その頃から、憧れの人も、もう来ない方がいいと言い出して。

それが悔しくて、私は意地でも遊びに行ったのだ。

今では、強く思う。

あのとき、あの人の言葉を聞いていればよかった。

私に来るなと言ったとき、その人たちは本当は私なんかに構っていない場合ではなかったのだ。

直接神殿に行つて、そこから外に出ずに帰っていた私は知らなかった。

その人たちがそのとき、とても大きな戦争をしていたことを。

その後の世界を揺るがすほどの戦争をしていたことを、知らなかった。

知らずに私が神殿に行った日、それまでは安全だったそこは戦場になつていた。

そして、あの人は、敵から私を庇ったのだ。

私はいつもの入口から区域の外に追い出されて、いつもあの人のところに導いてくれていた道は、きつとあの人が閉じてしまったのだろつ、二度と開くことはなかった。

それから、暫くして。

私は、精霊の長であり、女神と呼ばれる精霊——マリエス様に呼び出された。

マリエス様に伝えられたのは、私が懂れていたあの人が死んでしまったという事実。

あの人は教えてくれなかったけれど、実はあの人は神界でも偉い神様だったのだという。

世界が生まれたのとほぼ変わらない頃から存在し、世界を支えている『柱』の神。

寿命という概念を持たず、悠久の時を生き、世界の安定を司るはずだった人。

この世界には、不死などない。

先に口にしたとおり、最上級の神族や一部の高位の魔族のように、寿命を持たない命は存在する。

けれど、それは刻限が決められていないだけ。

どちらも外的要因で命を落とすことは普通にあつて、あの人はその外的要因で死んだ。

つまり、あの時戦争をしていた敵に、殺された。

その話を聞いたとき、私は酷く後悔したのだ。

だって、それはきつと私のせいだ。

マリエス様ははっきりとそうは言わなかったけれど、間違いなかった。

だってあの時、私は『敵』の攻撃から庇われたのだから。

私があの時あそこに行かなければ、あの人は死なずに済んだかもしれない。

私が忠告を聞いていれば、今もあの人はあの神殿にいたのかもしれない。

そんな想いが、私に刻まれて、消えなくなった。

だから、私は断ることなんて出来なかった。

マリエス様に、あの人から貰った知識や物を全て引き継いで世界を支える力となれと言われて、断れるはずもなかった。

私は精霊神と、死んでしまった『柱』の神の代わりに世界を支える『柱』となった七大精霊から洗礼を受け、下級神族になった。

下級神族と言っても、神界の人たちのそれとは違う。

世界を支える『柱』としての神族——つまり、私は最上級の『神』と同等の生命に変化し、寿命という概念は意味を失くした。

私はもう老いることはない。

精霊神であるマリエス様にちなみ、『妖精の女神』という役目を背負い、人間界から世界のバランスを探り、支える。

外的要因がなければ、このまま死ぬこともない。

万が一のときのために跡継ぎを用意した方がよいと言われたけれど、きつとそれも無意味なものに終わるのだろうと思っていた。

だから、私に与えられたこの神殿から出る日が来るとは思わなかった。

「——あなたは、本当にそれでいいのですか？」

私にそう尋ねたのは、マリエス様の導きで私の元にやってきた青年だった。

精霊神であるマリエス様と、七大精霊の選んだ『勇者』。

そう呼ばれていた青年は、真っ直ぐに私の目を見て尋ねたのだ。

「あなたはそこで、ずっとそうやっていて、本当にいいのですか？」

迷いのない琥珀の瞳が、真っ直ぐに私を射抜く。

その瞳は、誰かに似ているような気がした。

けれど、最初は誰だか思い出せなかった。

「そうやって、ずっと罪の意識に押し潰されたまま生きていくのですか？」

彼は、私の事情など知らないはずだった。

なのに迷わずそう尋ねられて、私は最初びくりと肩を震わせた。

感情の制御には、すっかり慣れているはずだった。

それなのにそれが抑えられなかった。

僅かな震えだったけれど、それで彼には全てを悟られてしまったようだった。

琥珀の瞳は真っ直ぐにこちらを向けられている。

その手が、不意に動いた。

「え・・・？」

私は驚いて目を睜る。

だってそれは、私に向けて伸ばされていたのだから。

「一緒に行かないか？」

彼は、私から目を逸らすことなくはつきりとそう告げた。

口調は尋ねているようだったけれど、違う。

あれには、何が何でも私を連れ出すという、強い決意があった。

それでも、私は最初はその誘いを断った、否定した。だって、怖かったのだ。

私と一緒に行くことで、今では人間界の運命を背負っていると言っても過言ではない、その青年の未来を閉ざしてしまうかもしれない。憧れだった、私を逃がしてくれた人の死が、私にそんな恐怖を与えていた。

けれど、彼は諦めなかった。

私が了承するまで、ずっとそこに居座って、ずっとずっと手を伸ばしてくれていた。

彼が、どうしてもそこまでしようと思ったのかわからない。

けれど、あんまりにも諦めないから、私も手を伸ばしてみようと思った。

その手を取ってみたいと思った。

だから私——あたしはその手を取った。

それが、旅の始まり。

ずっと変化のない時を過ごしていくのだと思っていたあたしの、新しい時間の始まりだった。

「そう考えると不思議な人なんだよなー」

「何がですか？」

宿に向かう途中、ぽつりと呟いた言葉に、すぐ前を歩いていたアスレイドが反応する。

こちらを向いて首を傾げる彼に目配せをして、1人怒ったように肩を怒らせたまま先頭を歩くミルザを見れば、彼は納得したように頷いた。

「確かに不思議な人ですね」

「アスレイドもやっぱり心当たりあり？」

「あなたが聞くんですか？ ユーシス。あなたは見ていたでしょうに」

「だってほら。人がその時何を考えていたかまでは、いくらあたしが女神でもわからないもの」

「そういうものですか」

「そういうものなんです」

本当にそういうものなのかはわからない。

かつて私が憧れた『あの人』なら、人の考えまでも理解できたのかもしれない。

だって、あの人は世界を支える『柱』だったのだから。

それでも、と思う。

あたしは、そんなこと分からなくてもいいのだ。

全部が全部理解できる万能な命なんかじゃ、決してない。

たまたまあの人と接触したから、今の役目を仰せつかっただけなのだ。

かつてはできないことに焦燥やら不安を感じていたけれど、今はどうでもいいと思う。

そう、彼が教えてくれた。

そこまで考えて、あたしは思わず笑みを零した。

一応子供がいる身であるというのに、あたしはずいぶん彼に惹かれていたらしい。

それでも、種族の違いとか立場の違いとか、どうでもいいと思ってしまふのは、仮にも女神失格だろうか。

「2人ともっ！！遅いっ！！」

ペースの落ちた自分たちに苛立ったのか、ミルザが大声で叫ぶ。

彼の苛々は、1人で仕事探しを押し付けせられたときから収まっていなかったらしい。

仕事はテストが1人で行ってくれたのだから、それで収めればいい

のに、どうやら今度はテストが1人で行ってしまったことを怒っているのだから、まったくしょうがない人だと思う。

その苛立ちが純粋な心配から来ているのだから、仲間に対して過保護だというべきか。

そうやって怒る姿がなんとも可愛くて、ついついからかいたくなる。そんな気持ちを押し込んで、あたしはにっこりと笑って見せた。

「はいはい。今行きますよー」

ぱたぱたと音を立ててミルザの傍に駆け寄って、その腕に腕を絡ませる。

さすがに予想外だったのか、ミルザはそんなあたしの行動に驚いたように目を瞠った。

「ちよっ！？ユーシ——」

「はいー！さっさと宿に行くわよりフィス。アスレイドもはいやーくー！」

「はいはい」

ミルザの腕を拘束したままぶんぶんと片手を振れば、アスレイドはため息を吐き出し、苦笑を浮かべて返事を返す。

そんな彼に、訳のわからないという表情をしたミルザが助けを求めるように視線を送るが、アスレイドはそれを綺麗に無視した。

「さー！れつつごーっ！！」

「ちよっ！？ユーシス！待って！転ぶから！！」
ずるずるとミルザを引き摺って宿へと向かう道を歩く。

その姿を見てアスレイドが笑っていたことに、きつとミルザは気づいていない。

あたしは気づいていたけれど、教えてなんてあげない。

後で気づいて怒るミルザも、結構可愛いのだと知っていて、それが見たいから。

そんな自分の考えに『年』を感じたけれど、そんなこともどうでもいい気がした。

この人と一緒にいられるなら、この人と今まで拒絶していた世界を見られるなら、年なんか気にするより、それはきつとすごく楽しいことだと知っていたから。

だからあたしは、許される限り彼と——彼らと一緒にいたいと思う。

それが、今のあたしの唯一の願いだと、今ははっきりと言えるから。

役割の人形

自分の存在に、意味などないと思っていた。

ただ、そこにあるだけの人形——それが自分なのだと。だから周囲からなんと言われようと、どうでもよかった。あの魔女に利用されようと、どうでもよかった。

どれくらいそう考えて生きてきたのかは、もうわからない。僕たち魔族の寿命は、人間よりもずっと長いのだから。

それが変わったのは、おそらくあの日。

『彼』に数回目に出会ったそのときだった。

僕の父は、魔界の中でも最も力を持つ国の王だったらしい。

らしい、というのは、僕には父の記憶はほとんどないからだ。

父の記憶は、ほとんど伝え聞いたもの。

母の記憶もほとんどない。

気がついたときには、あの魔女が母親顔で僕の傍にいた。

父は、魔王と呼ばれていた。

魔界の中で最も強い力を持つ国——それはすなわち、魔界を統べる国。

その国の王であつたから、父は『魔王』だったのだ。

母はその正妻だった。

魔族は、その力の強い者が上に立つ。

女性は力の強い男性に惹かれる。

逆もまた然り。

母は魔族の中でも、最も気高く、強く、美しいと言われる騎士だったらしい。

そんな母と王とまでなった父が互いに惹かれるのは、必然だったの
だろう。

当然、他にももっと父に惹かれる女性はいたけれど、父は母一筋だ
ったのだという。

そんな2人の息子であつた僕は、つまりは魔界の王子であつた。

そんな両親の息子だったから、周囲も僕には期待をしていたらしい。
力の強い魔族の子は、やはり強い魔力を持っていることが多いから。
だから周囲の人々は、僕が父の座を継いで魔王になると疑わなかつ
た。

その全てが、ある日唐突に崩れた。

あの魔女——イセリヤ・ローベルトが現れた、その日から。

イセリヤはかなりの力を持つ魔族だ。

力の強さを重視する魔族の中で、あの女が父の側近になるまでにそ
う時間はかからなかったらしい。

いつしかイセリヤは、母と共に父を支える双壁のような扱いをされ
ていた。

けれど、イセリヤには母にある何かがかけていたらしく、父がその
女を女性として愛することはなかったらしい。

それでもイセリヤは父に取り入ろうと誘惑を繰り返し、それが元で
母とは良くぶつかり合っていた。

そんなある日、事件は起こった。

魔王である父が、突然倒れたのだ。

母と二人きりでいたときに。

記録によると、父は毒殺であつたらしい。

その日父と共にいたのは母のみで、イセリヤは城を空けていた。

だから、必然的に、母が父を殺害した、という図式ができあがった。
母はそれを否定したけれど、周囲は聞かなかったらしい。

母は処刑され、その息子である僕は、城の地下に、大量の本と共に

幽閉された。

それは幼い頃の話。

記憶にも残らないほど昔の出来事。

全ては幽閉時代に世話をしてくれていた、母を敬愛していたという侍女に聞いた話だ。

その侍女も、いつしかなくなっていた。

そして、ある程度成長した僕を迎えに来たのは、父の座を継いだイセリヤだった。

「ヨシユアスレイド様」

そう呼ばれたとき、僕は最初、それが僕の名前だとは気づかなかった。

侍女は、ここに来るものたちは皆、僕のことを『ご子息様』か『あの女の息子』と呼んでいたから。

「これからは私が母親代わりですわ、ヨシユア様」

そう、僕に勝手な愛称をつけた女は、僕を地下から連れ出した。

『卑怯な騎士の息子』。

既にそんなレッテルを貼られた僕は、プライドのない女の息子として周囲には冷たい目で見られるのが最初から当たり前だった。

父の座を継いだイセリヤが手を出すなど言ったから、王子として生かされている——そんな感じだった。

そんな城の中で居心地の悪いそうにしていると、あの女はにっこりと微笑んで言ったのだ。

「そんな奴らには、力を見せ付けてやればよろしいのですわ」

女の言うとおり、僕は本で学んだ知識だけで魔力を行使した。

僕の力は、先代魔王の血を継ぐだけあって、かなりのものらしい。周囲はあつという間に陰口を叩かなくなった。

『卑怯な騎士の息子』という周囲の目は、変わらなかったけれど。

それから何年経っても、周囲のその目は変わらなかった。

最初は僕を敬っていたイセリヤも、そのうち母親顔で僕を呼び捨て

るようになった。

それはきつと、彼女がその地位を確固たる物にし、先代魔王の息子である僕に頭を下げる必要が無くなったからだろう。

けれど、僕の強い魔力は、彼女にとっては必要だった。

だから彼女は僕を部下とし、魔界の全てを手中に収めたあと、人間界へと進出した。

後に悪の帝国として歴史に名を刻むことになる国を支配するために。その頃には、僕は全てに興味を失っていたのだと思う。

どこに言っても僕を見る目は変わらない。

どんなに変えようとしても、変わらない。

最初は相談に乗ってくれていたイセリヤも、そのうち話すら聞いてくれなくなった。

そうして、誰も自分の存在を認めてくれないのだと気づいたら、そのうち全てがどうでもよくなった。

けれど、僕も魔族の端くれ。

そんなことで自ら生を終わらせるという選択を選ぶことは、プライドが許さなかった。

だから、いつしか与えられた任務をこなすことだけが、僕のプライドに、生きる理由になっていた。

「まるで人形だな」

その言葉を聞いたのは、確か、あの女が死んだ、あの帝国での戦いだったはずだ。

目の前にいたのは、もう何度も刃を交えた人間の青年。

世界を支配しようとした帝国と魔女を倒すために、世界中の国から集まった軍勢を率いてきた、精霊に選ばれた『勇者』と呼ばれる存在。

琥珀色の瞳に冷たい光を浮かべた彼は、右手に剣を握ったままこちらを見つめていた。

「何の話です？」

「君の目が、まるで人形だ」

嘲るように笑って尋ねれば、彼はきっぱりそう答えた。

その言葉に、口の端が持ち上げる。

「そうかもしれないね」

わかっていた。これは、自嘲だ。

零れた笑みは、酷く乾いていた。

「所詮、僕はその役割をこなすだけの人形ですから」

そのためだけにここにいて、生かされている。

そんなことは、自分が良く知っていた。

だから否定をすることも、する気もなかった。

きつと、普通の『勇者』と呼ばれる存在なら、この発言に反発するのだろうなんて、昔読んだ物語だけが、何故か頭をよぎった。

「役割をこなすだけの人形、か・・・」

ぽつりと、目の前の青年が呟いた。

構えていたはずの剣の切っ先が、何故か地面に落ちた。

予想もしなかったその反応に、僕は驚いた。

「そうだな・・・。この世に生きる者は、全てそうなのかもしれない」

彼が口にしたのは、人々に希望を与える存在とは思えない言葉だった。

「役割を与えられて、そのために生きる。それ以外のためには、生きる必要はない」

伏せた目は、前髪に隠れてしまっただけに見える。

顔を空に向けているはずなのに、その琥珀は僕の視界には入らない。

「所詮、全ての命は・・・そうなんだ」

その言葉に、困惑した。

悟りきったような、いや、違う。

どちらかというと、全て諦めてしまっているかのような声だった。

「だから、君がそう望むのならそう生きればいい」

その顔が再び自分に向いたとき、びっくりと体が震えた。

目は、まだ前髪に隠れていて、見えない。

「誰もその理からは逃げられない。だから好きにすればいい。それは、この世界の真理なのだから」

静かに告げるその声には、感情が宿っていないように思えた。

だから、かもしれない。

僕は、今が彼との戦いの最中だと知っていたのに、何かを尋ねようとした。

「あなたは・・・」

「だから」

けれどその言葉は、彼自身によって遮られた。

かちゃっと金属同士がぶつかり合うような音が耳に届いて、我に返る。

見れば、目の前の青年が剣を持ち替えていた。

今までずっと右手に握られていたその剣は、左手にあった。

ずっと前髪に隠れていた瞳が露になる。

現れた琥珀には、先ほどまでにはない光が宿っていた。

左手で握られた剣を、先ほどとは違う構えでこちらに向ける。

それに驚いている暇なんて、なかった。

「僕が僕に与えられた役割をこなすために、そこを退いてもらう」
その言葉を継げた途端、彼の動きは、それまでとはがらりと変わったのだ。

別人のような動きに、放心していた僕が反応できるはずもなかった。まるで役割を演じると決めた瞬間、その青年がそれまでの彼とは別の人物と入れ替わってしまった、そんな感じだった。

勝負は、あつという間についてしまった。

媒介としていた杖を折られ、召喚された精霊によって魔力を封じられた僕に勝ち目などあるはずない。

魔女の——人間たちが『魔王』と呼ぶ女の側近である僕は、このまま殺されるのだらうと、そう思っていた。

けれど、僕が抵抗の意思を見せないと知った瞬間、その青年はいともあっさりと剣を収めたのだ。

とどめを刺さないのかと尋ねれば、彼はあっさりと言い切った。

抵抗の意思のない者を殺すなんて行為は、『勇者の役割ではない』と。

そこで僕は悟る。

彼は、自分の意思でこの戦場に立っているのではないのだと。

あくまでも『与えられた役割を演じる』ためだけにここにいるのだと。

だからそこ、余計に気になった。

「・・・何故です？」

気がついたら、僕は去ろうとする彼に声をかけていた。

「与えられた役割と知っていて、あなたは何故それを成し遂げようとする？」

「それが役目だから」

「本当にそう思っているんですか？」

自分らしくもなくカんでしまったと、思う。

彼が一瞬目を瞞って、不思議そうにこちらを見たから。

「・・・どうして？」

「本当にそう思っているなら、何故そんな強い目をしていられるんです!？」

少し強い口調になってしまったのは、無意識だったのだと思う。

けれど、そのときはそんなことを気になどしていなかった。

ただ、問いかけに対する僕の言葉に驚いたのか、彼はほんの少しだけ目を丸くすると、すぐに微笑んだ。

「強がっているだけだよ」

微かなそれは、きつと自嘲の笑みだった。

純粋な笑顔でないことは、わかる者にならばすぐにわかっただろう。

「こんな世界でも、役割を完璧にこなせば、こんな僕にでも居場所があるかもって、そう思って強がっているだけだ」

そこまで言つて、彼はほんの少しだけ目を伏せた。

「本当の居場所なんて、あるはずなのに」

まただ、と思つた。

全て諦めてしまったかのような、そんな声と口調。

僕もきつと、そんな声と口調をしていたのだと、思う。

彼と僕は同類だ。

だから、言つても無駄だと思つた。

「作ろうとは、思わないんですか？」

わかつていたのに、何故かその言葉が口を突いて出た。

青年が、ほんの僅かに目を睨り、驚いたように僕を見る。

「居場所を、作ろうとは思わないんですか？」

聞き違いだと訂正することもできたのだと思う。

けれど、そのときの僕はそんなことを考えもせず、その言葉を復唱した。

その問いに、目の前の青年は、琥珀色の瞳を眩しそうに細めた。

「作ろうと思つたら、作れると思う？」

「それは——」

彼の問いかけに、僕は答えを返すことができなかった。

だって、僕自身は作れるとは思つていなかった。

作ろうとしても、作れたためしなかった。

それでも、そんな問いかけをしてしまった以上、それに僕自身が否定の言葉を返すことなんてできなかった。

「——ふっ」

言葉を探していると、不意に笑うような声が聞こえた。

驚いて顔を上げると、青年がくすくすと笑っていた。

人が真剣に悩んでいるというのに何がおかしいのかと、思わず文句を言つてやろうかと思つたとき。

「よかつたら、一緒に作らないか？」

唐突に彼が言つた言葉が、一瞬間に入つてこなかった。

「——は？」

その言葉を飲み込んで、頭で反復して、漸く理解しても、口から出たのはそんな間抜けな声だった。

そんな僕に向かい、彼はにっこりと笑う。

「居場所、一緒に作らないか？」

「何故僕が・・・」

「君もないんだろう？居場所」

そう言われ、僕は思わず息を呑む。

その反応すら、彼は予測していたのだろうか。

薄っすらと微笑むと、ほんの少しだけ声を抑えて、告げる。

「わかるさ。君は僕と同じ目をしてる。彼女とも」

彼女とは、僕たちの戦いを少し離れてたところで見ていた、あの金髪少女のことだろうか。

気がつけばいつも彼と共にいるあの少女も、僕や彼と同じだということだろうか。

感じたその疑問を尋ねたい気持ちを、ぐっと押さえ込む。

そして顔を無向けて、そっけなく、答えになっていない答えを返した。

「僕はイセリヤの部下です」

「なら、僕がイセリヤを倒したら一緒に行かないか？」

諦めるかと思つたのに、彼はあっさりとそう尋ね返してくる。

できるはずがないと思つた。

自分の役割を演じているだけのこの男に、目的を持って行動しているらしいあの魔女を倒せるはずがないと。

そう思っていたから、僕は答えた。

「倒せたら、ですね。考えておきます」

その言葉に、目の前の青年は満足したように笑つたのだ。

今思えば、もしかしたらこのとき、僕は望んでいたのかもしれない。

彼と共に行くことを。

彼があ魔女を倒し、僕自身を変えるきっかけを作ってくれることを。

そして彼は、その言葉どおりあの魔女を倒し、僕の目の前に戻ってきた。

人間たちが歓声を上げる中、彼は金髪の少女と連れ立って、身を隠していた僕のところへ迷わず戻ってきた。

そして、先ほどまでの、役割を演じる人形だと言っていたときの表情が嘘のような笑顔で、僕に手を差し出したのだ。

「よろしく。えっと・・・ヨシユア？」

彼が口にしたのは、他の魔族が僕を呼ぶときに使っていた名だった。そういえば彼の前で名乗ったことがないことを思い出して、僕は名乗る。

「ヨシユアスレイドです。ヨシユアスレイド」サールソーイ」

「じゃあ、ヨシユアでいいのかな？」

「その呼び方は、嫌いです」

それは、あの魔女が僕を呼ぶためにつけた名前だから。

いつしか嫌悪しか抱かなくなったあの女のつけた名で呼ばれるのは、何だか嫌だった。

「そうか・・・なら」

彼は、ほんの少しだけ悩んだようだった。

けれど、その顔はすぐに先ほどの笑顔に戻る。

「アスレイドって言うのはどうかな？」

「あんま短くなってないよミルザ」

僕が思ったことを口にする前に、それまで黙っていた少女が口を挟む。

確かに彼女の言うとおり、愛称にしては長い気がした。

「でも響きがかっこいいと思ったんだけど」

「まあ、確かにかっこいいかな」

「だろう？どうかな？」

あっさりと折れた少女に満足したのか、彼はにっこり笑ってこちら

を見る。

その、無邪気以外のなんと表現したらよいかわからない笑顔を見たら、なんだか反論する気が起きなかった。

それに、と思った。

あの女がつけた名前と違うなら、愛称なんてなんでもよいかも知れないと。

「好きに呼んでください」

だからそう答えれば、彼はにっこりとそれまで以上の笑顔を浮かべた。

そして迷うことなく左手を僕に向かって差し出す。

一瞬戸惑ったけれど、すぐにその理由に気づいた。

先ほどの戦いの最中に、彼は剣を右手から左手へ持ち替えた。つまり、彼は本来左利きなのだ。

そして、普段は隠しているのだろうそれを隠さずにいる。

「じゃあ、よろしく。アスレイド」

「よろしく願います、ミルザ」

その意味に気づいたから、僕も左手でその手を取った。

きつと、そのときからなのだと思う。

真の意味で僕の——いや、私の人生が始まったのは。

その出会いがなければ、私は今でも人形だったのだろうか。

その答えを知ることとはもうできないけれど、知らなくて良かったと、今では心から思うのだ。

昔など、きつとどうでもいい。

今ここに、彼らという私が、本当の私なのだと信じることができるから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2015y/>

とある一行の記録

2011年11月11日20時50分発行